

# 身近なまちの風景物語(35)

## 安穩な漫歩

何年かぶりに訪れた。広々として、やけに明るくなったような気がする。道路が広がったのだろうか。

よく見ると、以前入った店はそのままだ。両側の建物はいずれも年季が入っている。建て替わってはいない。ということは、道自体の幅は同じだ。

土産物店や飲食店が立ち並ぶ観光地や参道は、店をひやかしながら歩きたくなる。ふだん目にしない商品や食材を見ると新鮮だ。みやげに何を買おうか、どこで昼食をとろうかと思案するのも一つの楽しみだ。

ただ道路を通る車両には用心しなければならない。対面する歩行者や背後から来る自転車にも目を配り、道の反対側に行くにも行き交う自動車に注意する必要がある。特に子ども連れの親はキョロキョロしなければならない。気が休まらない。

歩道と車道の段差のない道路では、買い物客などの歩行者と自動車との共存は難しい。低速の運転を促しても限界はある。各地で共存の方策に苦心している。

道幅が変わらないのに広く感じたのはなぜだろう。車道があって、その両側に歩道がある構成も変わらない。

思い起こすと、歩道の幅は以前よりも広い。逆に車道は狭くなっている。アスファルト舗装から敷石に変わり、中央線（センターライン）も車道外側線もなくなった。

確かにこの方が自動車の速度は遅い。歩行者や対向車に気を遣う運転者は自ずと減速するようになる。

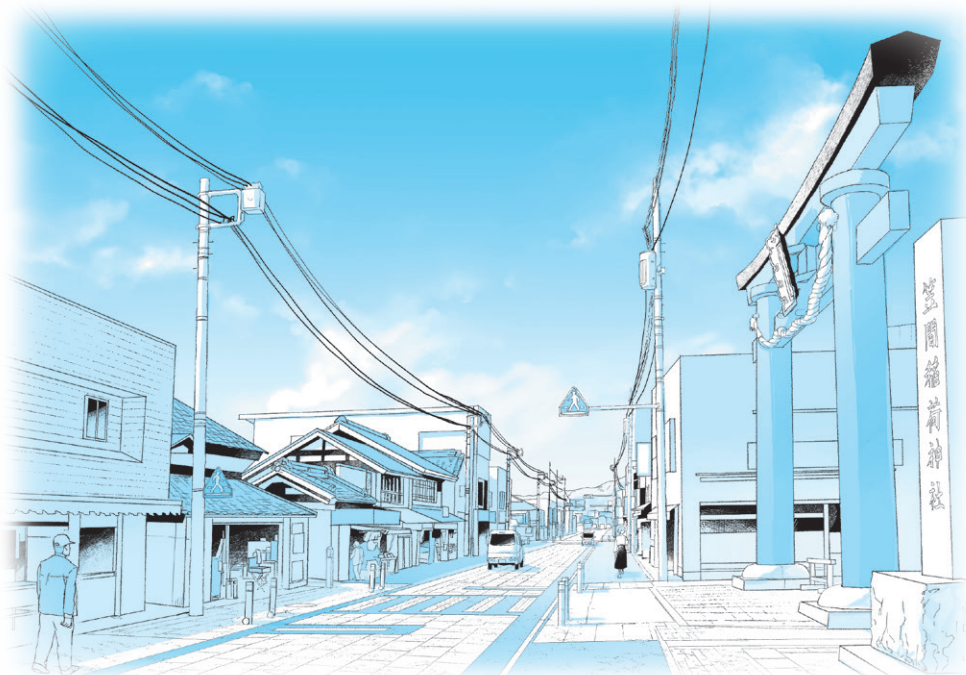
制限速度や横断歩道なども、車道で使用されている石材とその並べ方を変えて表示している。車道を横断する箇所の歩道には敷石と車止めがある。歩行者にも運転者にも目印になるが、かといって過剰な工作物にはなっていない。

歩ける範囲が広くなり、景観に配慮した道路整備が、明るく広々とした印象をもたらした。買い物客や観光客といった歩行者が重視されている。人と車の共存を志向した工夫がある。

久しぶりの来訪で心が晴れた。安心してそぞろ歩きを、そして食べ歩きを楽しむことができた。

野中 勝利

筑波大学 大学執行役員 芸術系長 教授



挿絵：久田琳佳子（筑波大学大学院博士前期課程2年）